

夏目漱石『野分』論

——「慈善」を視点として——

宮 蘭 美 佳

(1)

夏目漱石「野分」は、明治四〇年一月「ホトトギス」に掲載され、後に明治四十一年九月、春陽堂から刊行された単行本『草合』に収録された作品である。

醉美生／有頂天「文壇時言」は、「野分」を次のように評し、道也を通じて表現されている「一篇の大精神」が読者を感じさせると評価する。

▲「野分」は力ある作物である。主人公白井道也を通してあらはれて居る一篇の大精神は讀者を感激せしめて、一種偉大なる崇高なる想念を起さしめる。此點に於て此作は近來の我文壇に類例のなきものであつて却て遙か以前の露伴の「五重の塔」又は「二日劍」などに籠て居る精神と氣脈を通じて居るもの、やうに思はれる。⁽¹⁾

忘憂子「文藝時潮」も同様に、題名ともなっている、秋から冬にかけて吹く強い風である野分のイメージを、白井

道也の文学者としての「頸直不屈の精神」の形象化に巧みに生かしており、読者に「崇高なる思想」を起こさせる点を評価する。

文學者白井道也の頸直不屈の精神は全編を貫いて讀者をして一種偉大なる、崇高なる思想を起さしむる。「野分」は此篇の精神の表象である。野分には淋しき中に力がある。野を吹き、山を吹き、地上の萬物を吹き倒さずんば止まざる概がある。而かも、「ごう、ごう」といふ聲が淋しい感じを起さす。此篇の精神は正さにそれである。(2) (ルビは省略)

同時代評において「野分」を評価する理由に、白井道也を通して形象化されている理念に読者が共感できる点が挙げられる⁽³⁾。一方で「野分」に対する批判としては、次に挙げる黒潮子「丁未文壇 ▲漱石の野分(下)」に見られるように、道也や高柳をはじめとする文学士の人物表象に人を馬鹿にしたような滑稽さが感じられるため、作品中で展開される実業家に対する批判の説得力を減じている点が挙げられる。

◎次に漱石は頻りと世間知らずの文學士を描くが何れも餘りに人を馬鹿にした嫌ひがある。其富豪攻撃は猫物語以來二百十日や今度の野分などにもずいぶん酷烈に遣つて居るが、多くは滑稽を以て迎へられ、一面諷論の味があると同時に、他面には如何にも淺薄な坊ちゃんの人生觀としか受け取れぬ。(4)

このように同時代評は『野分』について、白井道也を通して表現された理念が読者を感動させる点を評価しつつ、その理念を担うべき人物が幾ばくかの滑稽さを有して表象されるため、読者の感動を減じている点を批判している。『野分』は、同時代評で「結末高柳が百圓の金で道也先生の急を救ふのは、窮した落ちである。全體にこの作は結構が不完全で何となく支離滅裂な感じがある」⁽⁵⁾とされて以降、結末部をおおむね否定的に捉える見方が多い。この

点が『野分』があまり評価されてこなかった理由として挙げられる。越智治雄の「小説の結末にこだわるかぎり、道也の「人格論」が世に出ることはまずあるまいし、高柳の死もほとんど確実である。漱石は、生活の、世間の、つまりは現実の強力さを無視することはできないのだが、作品世界に勝利を奪還しようとしたのだと言ってもよい。」⁽⁶⁾との見方をはじめ、次に挙げる西垣勤の論を代表的なものとして挙げるができる。

すなおにこの話の続きを考えてみると、『人格論』は高柳から中野輝一の手にわたることになる。そして中野が高柳の請いを容れてこれを出版するかどうかになる。道也は、兄がつとめる会社の社長の息子によつて救われ、更に『人格論』を出版してもらうことになる。もしそうなったあとで道也がその内実を知れば憤死でもする他はあるまい。⁽⁷⁾

ところで、『野分』は、作品冒頭で道也が行ったとされる演説の題名が「金力と品性」であり、先に挙げた結末部分での百円に至るまで、金銭に関する言及が多く見られる作品である。藤堂尚夫は夏目漱石の作品にみられる金銭について次のように述べている。

漱石の一生は〈金〉と戦い、〈金〉に悩まされ続けた一生であった。身近な問題にはたいがい〈金〉がからんでいた。そして、その戦いや悩みを文学として作品に描き続けてきた。かりに〈金〉が漱石の文学から取り除かれたならば、漱石の文学は現在とはかなり違ったものとなったであろう。〈金〉は漱石を苦しめたが、漱石は彼の文学の要因として〈金〉を取り込んでしまっているのである。⁽⁸⁾

「野分」における金銭の問題については、以前、道也と妻における金銭に対する認識の相違の観点から論じた⁽⁹⁾が、本稿では、作品中に描かれている慈善音楽会や「人を救うたための」演説会に着目し、「野分」における金銭観や文

学観について考察することにした。

(2)

作品内容の詳細な検討に入る。作品の冒頭で「白井道也は文学者である。」と登場人物である白井道也の位置づけが語られるが、続けて「八年前大学を卒業してから田舎の中学を二三箇所流して歩いた末、去年の春飄然と東京へ戻つて来た。」と、直ちには「文学者」としての活動は語られず、白井道也は、田舎の中学の教師であつたことが語られる。

始めて赴任したのは越後のどこかであつた。越後は石油の名所である。学校の在る町を四五町隔て、大きな石油会社があつた。学校のある町の繁栄は三分二以上此会社の御蔭で維持されて居る。町のものに取つては幾個の中学校よりも此石油会社の方が遙かに難有い。会社の役員は金のある点に於て紳士である。中学の教師は貧乏なところが下等に見える。

この箇所で語り手は、道也を紹介しつつも「町のものの」の立場に寄り添う。会社の役員が紳士と見なされる理由を「金のある」点にあり、「貧乏なところが」「下等に見える」と語る。「会社の役員」「金のある」「紳士」「中学の教師」「貧乏」「下等」の価値観の図式は語り手によつて提示されるのである。一方でこの語り手は、「下等に」「見える」と、自ら提示した価値観に対して、後に相対化される余地をあえて残しながら語る。少し後の箇所では次のように語られる。

道也はある時の演説会で、金力と品性と云ふ題目のもとに、両者の必ずしも一致せざる理由を説明して、暗に会社の役員らの

傲慢と、青年子弟の何等の定見もなくして徒らに黄白万能主義を信奉するの弊とを戒めた。

ここでは、語り手は道也に寄り添い、「金力」、資産を豊富に所有する、生産能力を有し金銭を生み出すといった経済力の強弱と、「品性」の優劣は必ずしも一致しないことを語る。先に語り手が提示した価値観の図式は、道也に寄り添って語る箇所でも相対化される。語り手の視点が導入されることで、読者は「町のもの」と道也、両者それぞれの主張と価値観を並列した位置での俯瞰が可能になる。これにより一連の経緯を読者は、敵味方に分かれた人物同士の対立としてではなく、それぞれの主張と価値観の相違を互いに照射し合う出来事として捉えることになる。

また、この箇所で道也は、「黄白万能主義」そのものではなく、「黄白万能主義」を信奉するにしても、その信奉が自分自身の「何らの定見」に基づいていない「青年子弟」の姿勢を批判している点に留意したい。

道也の最後に望を属して居た生徒すらも、父兄の意見を聞いて、身のほどを知らぬ馬鹿教師と云ひ出した。道也は飄然として越後を去った。

道也の演説は、「町のもの」、役員や同僚、校長らとの軋轢を生み出した。道也の演説は「青年子弟」に向けられたものであったが、教師である道也にとって最も関係が深く、最も直接的影響を与えているはずの「青年子弟」である生徒までもが、道也を批判しだした。

後に出て来るが高柳はこの時、教師に扇動されて「何故だかわからない」ままに、道也の家に石を投げ込み、道也を追い出すことに加担している。高柳を始めとする生徒は、道也の主張に賛成するにしろ、反対するにしろ、自分自身の考えに基づいて行動することを結局学ばなかったのである。

越後を去った道也は、九州に赴任する。

次に渡つたのは九州である。九州を中断して其北部から工業を除けば九州は白紙となる。炭鉱の烟りを浴びて、黒い呼吸をせぬ者は人間の資格はない。

道也の次の赴任地である九州は、エネルギー源となる石炭、その他の工業製品の生産に携わらない者には、人間としての権利があるとすらみなされない土地柄であることが、語り手によって示される。

権利のないものに存在を許すのは実業家の御慈悲である。無駄口を叩く学者や、蓄音機の代理をする教師が露命をつなく月々幾片の紙幣は、どこから湧いてくる。手の掌をぼんと叩けば、自から降る幾億の富の、塵の塵の末を舐めさして、生かして置くのが学者である。文士である、さては教師である。

語り手は土地の人々の立場に寄り添いながら、更に続ける。

金の力で活きて居りながら、金を誹るのは、生んで貰った親に悪体をつくと同じ事である。其金を作つてくれる実業家を軽んずるなら食はずに死んで見るが、い。死ねるか、死に切れずに降参をするか、試みて見様と云つて抛り出された時、道也は又飄然と九州を去った。

ここでは、中学の教師は自分自身で収入を得る存在ではなく、生活を支える収入は、実業家から一方的に恵んでもらう存在として位置づけられている。道也にとって教師を辞めることは、実業家から金銭を一方的に恵んでもらっている関係性からの離脱の宣言であった⁽¹⁰⁾。

後に、道也は「学校に愛想をつかした彼は、愛想をつかした社会状態を矯正するには筆の力によらねばならぬと悟つたのである。」と、文筆活動に活路を見出す。教師は自分の考えや判断を伝えて直接生徒に影響を与えることができる。人格的なものも含めて直接的に強い影響を与えられるという点で効率的である。しかし、三度辞任に追いこまれたことにより、道也はその直接性に信頼を置くことができなくなった。「筆の力」文筆活動は、作品を通して自分の主張を述べるものであり、作品という媒介物を通じての影響力の行使となる。三度の辞職により直接的に影響を与えることをことごとく断念させられたため、媒介物を伴った影響力の行使としての「筆の力」文筆活動や、作品という媒介物への信頼を高めたのである。

(3)

道也の金銭に対する主張を検討することにする。

英語を教へ、歴史を教へ、あるときは倫理さへ教へたのは、人格の修養に附随して蓄へられた、芸を教へたのである。単に此芸を目的にして学問をしたならば、教場で書物を開いてさへ居れば済む。書物を開いて飯を食つて満足して居るのは綱渡りや綱を渡つて飯を食ひ、皿廻しが皿を廻はして飯を食ふのと理論に於て異なる所はない。

中学の教師として教えていた内容自体は道也にとつてはさほど重要ではなく、単なる枝葉末節の技術でしかないのである。彼にとつて大切なのは学問の効用である。

学問は綱渡りや皿廻しとは違ふ。芸を覚えるのは末の事である。人間が出来上るのが目的である。大小の区別のつく、軽重の

等差を知る、好悪の判然する、善悪の分界を呑み込んだ、賢愚、真偽、正邪の批判を謬まらざる大丈夫が出来上がるのが目的である。

学問の目的は、人生や社会における問題について、さまざまな要素を考慮した最適な判断のできる人間をつくることであると道也は考えている。

道也はかう考へてゐる。だから芸を售つて口を糊するのを恥辱とせぬと同時に、学問の根底たる立脚地を離るゝのを深く陋劣と心得た。^(三)

(2) で述べたように、芸を披露したり教えたりするのは目に見えるものの生産活動ではない。人間が出来上がるとは、複数の条件や事情を勘案して社会や文化に対して最適な判断や行動ができることである。道也は、それらの判断主体として人間を捉えている。道也によると、人間の活動全体に附随する感覚や見解を洗練させることが学問の意義なのである。道也は演説の中で次のように述べる。

「さうでせう——金貨を煎じたつて下痢はとまらないでせう。——だから御医者に頭を下げる。其代り御医者は——金に頭を下げる」

金銭が直接病気を治すことはできない。病気になつて医者にかかるとき、病気に対する診断や治療といった医者の権限や技術に金を支払う。医者はその対価として金銭を受け取るのである。医者の診断や治療は形のあるものでないにもかかわらず、この関係については、誰もが自明のこととして受けとめている。しかし、学者と金持ちの関係はそ

うではない。

商人が金を儲けるために金を使ふのは専門上の事で誰も容喙が出来ぬ。然し商買上に使はないで人事上に其力を利用するときは、訳のわかつた人に聞かねばならぬ。さうしなければ社会の悪を自ら醸造して平気で居る事がある。今の金持の金のある一部分は常に此目的に向つて使用されてゐる。それと云ふのも彼等自身が金の主である丈で、他の徳、芸の主でないからである。学者を尊敬する事を知らんからである。

金を使つて金を儲けるのは金の再生産である。このような再生産によつて金を稼ぐ技術は商人や金持の領分である。商人や金持は金を再生産する以外のことを知らない存在である。金を金の再生産以外の目的に用いる際の判断は、学問を通してあらゆる条件を勘案して最適な判断や行動ができる修養を積んでいる学者の方が優れている。だから、学者の判断を尊重すべきというのが道也の主張である。

高柳が地理学教授法の原稿を渡した金を手に、ミルクホールへ入る場面がある。

懐中には二十円五十銭ある。只今地理学教授法の原稿を四十一頁渡して金に換へて来た許である。一頁五十銭の割合になる。一頁五十銭を越ゆべからず、一ヶ月五十頁を越ゆ可からずと申し渡されてある。

是で今月はどうか、かうか食へる。外から呉れる十円近くの金は故郷の母に送らなければならない。

高柳の主な収入源である地理学教授法の訳も依頼先から仕事量が制限されており、高柳の収入は外からの要因で制限されていることが語られる。ミルクホールにある「江湖雜誌」に掲載された中野君の文章に「色情狂!!!」と書かれていたように、作品という媒介物を通じての影響力の行使は、書いた本人の意図を全く誤解されて受け取られるリス

クも抱え込むことは避けられない。

ミルクホールの箇所は、団子坂の菊人形の収入について大いに論じている二人の学生や、蜜柑をむきながら、その汁を牛乳の中へたらしながら文芸倶楽部の芸者の写真をはぐっている書生が視野に入る、公共の場での黙読¹⁰⁾によって、公共との関係性を視野にいれながら、自分の行動や自己を再帰的に考えるようになる過程が見事に視覚化されている¹¹⁾。高柳が「解脱と拘泥」に感動するのは、「解脱と拘泥」に「彼等の意の如くなる学徒があれば、自己の天職を自覚せざる学徒である。」とあり、金を持たない稼げない彼にも学徒としてなすべきことがあって、しかもできることに気づかされたからである。生活には衣食を賄うといった消費が伴う。高柳は「衣食の為に勢力をとられて仕舞つて」文学作品を書くことができないと、生活の糧を得ることと文学を別に考え、また、生活のための消費を文学作品の制作を妨げるものと考えている。その中で、ミルクホールでの牛乳とパンという食費としての消費に対して、牛乳とパンの代金以上に、予期しない形で自己肯定の意義を見出したのである。

文学は人生其物である。苦痛にあれ、困窮にあれ、窮愁にあれ、凡そ人生の行路にあたるものは即ち文学で、それ等を嘗め得たものが文学者である。文学者と云ふのは原稿紙を前に置いて、熟語字典を参考して、首をひねつてゐるような閑人ぢやありません。円熟して深厚な趣味を体して、人間の万事を臆面なく取り捌いたり、感得したりする普通以上の吾々を指すのであります。其取り捌き方や感得し具合を紙に写したのが文学書になるのです。だから書物は読まないでも実際其事にあたれば立派な文学者です。

また、道也は、彼の人生や生活全体を「文学」として捉え、彼の存在自体が「文学者」として文学に貢献していると考へる。

江湖雜誌の編輯で二十円、英和字典の編纂で十五円、是が道也の極まつた収入である。但し此外に仕事はいくらでもする。新聞にかく、雑誌にかく。かく事に於ては毎日毎夜筆を休ませた事はない位である。然し金にはならない。たまさか二円、三円の報酬が彼の懐に落つる時、彼は却つて不思議に思ふのみである。

このように文筆で得た金銭を生活と、「其夜彼は彼の著述人格論を二百五十頁までかいた。」とあるように、文学作品の創作のために用いている。彼の人生や生活していること全体が「文学者」として文学に貢献していると考えているのだから、自らに関する収入と支出という金銭の流れを自分で統制することもまた「文学者」としての活動なのである⁰⁴⁾。

(4)

高柳と中野君は高校時代からの友人である。語り手によって二人は次のように紹介される。

高柳君は口数をきかぬ、人交りをせぬ、厭世家の皮肉屋と云はれた男である。中野君は鷹揚な、円満な、趣味に富んだ秀才である。此両人が卒然と交を訂してから、傍目にも不審と思はれるくらい昵懇な間柄となつた。

中野君は語り手によって次のように紹介される。

中野君は富裕な名門に生れて、暖かい家庭に育つた外、浮世の雨風は、炬燵へあたつて、縁側の硝子戸越しに眺めた許りである。

語り手は、高柳から聞いた、中学の教師時代のことを道也に確かめてみたい中野君を「一言にして云へば中野君は

ひまなのである。」と切り捨て、道也からも、「余つ程暇があるんでせう。あんな事を真面目に考へてゐる位だから」と気楽に見られて、批判的なまなざしで見られている。一方で、中野君は富裕な生まれでありつつ、「趣味に富んだ」文学を解する人物として語り手は紹介する。社長の父親とは違い、中野君は富裕な生まれではあるが実業家ではない。実業活動には携わらず消費活動のみを行う人物として設定されている。

中野君は切符があるからと、高柳を音楽会に誘う。

「今日はそこに慈善音楽会があるんで、切符を二枚買はされたんだが、外に誰も行き手がないから、丁度い、。君行き給へ。」

「入らない切符などを買ふのかい。勿体ない事をするんだな」

「なに義理だから仕方がない。おやぢが買ったんだが、おやぢは西洋音楽なんかわからないからね」

「夫ぢや余つた方を送つてやればい、のに」

「実は君の所へ送らうと思つたんだが……」

音楽が聴きたい訳でもないのに切符を買う行為を、高柳は「勿体ない事」と不思議がる。音楽そのものの価値もあるが、慈善音楽会であるから、音楽会の切符を買うという消費行動自体に、社会に貢献する、困っている人を助けるといった意味合いがある。切符と交換された金銭は、何らかの理由で社会から疎外された人のところへ流れるであろう。音楽は、富豪から困窮する人へ金銭の流れを生み出すのに一役買っている。社長である中野の父親は義理で切符を買ったとのことで、音楽に関心がある訳ではないが、結果として音楽が媒介となることで、富豪から困窮する人へ金銭の流れを生み出している。

「い、とは云はない。然し演説会の方は前からの約束で——それに今日の演説は只の演説ではない。人を救ふための演説だよ」
「人を救ふつて、誰を救ふのです」

「社のもので、此間の電車事件を扇動したと云ふ嫌疑で引つ張られたものがある。——所が其家族が非常な惨状に陥つて見るに忍びないから、演説会をして其収入をそちらへ廻してやる計画なんだよ」

一方、道也は富豪でも資本家でもない。しかしながら、演説という活動を媒介にして金銭を集め、困窮した人に送ろうとしている。これも慈善活動であろう。自分の生活と存在自体が「文学者」であると考え、道也にとつては、演説も「文学者」としての活動である。豊かな資本を持たなくとも、困窮した家族を助けたい、という思いがあれば、中野君の父親のような富豪と同様に、困窮した人への金の流れを産出することができることが示されている。

講演者は四名、聴衆は三百名足らずである。書生が多い。其中に文学士高柳周作がある。彼は此風の中を襟巻に顔を包んで咳をしながらやつて来た。十銭の入場料を払つて、二階に上つた時は、広い会場はまばらに席をあまして寧ろ寂寞の感があった。

高柳は道也の演説を聴く目的で十銭の入場料を支払っている。この十銭も電車事件の嫌疑の影響で困窮した人のところへ行くであろう。主催者の目的と、支払う人の思いはずれていても、演説の対価の入場料を支払う際、この消費行為に困窮した人を助けるといふ目的が附随することを意識する。活動する人と活動の結果金を最終的に受け取る人は別である。しかし、演説を聴くことの対価として金銭が支払われることにより、演説によって困窮した人への金の流れが生み出される。ここでの演説は、文化的営為そのものの内容に相まって、「困窮した人を助ける」目的を十銭の価値に附随させる装置なのである。

道也の前になされた演説では、文士の保護が論じられる。

「……文士保護は独立しがたき文士の言ふ事である。保護とは貴族的時代に云ふべき言葉で、個人平等の世に之を云々するのは恥辱の極である。退いて保護を受くるより進んで自己に適當なる租税を天下から払はしむべきである」と云つたと思つたら、引き込んだ。聴衆は喝采する。

作品の冒頭でもそうだが、文士は保護される者、一方的に金銭を恵まれる者、という位置づけがなされている。「文学者」は、富豪から恵んでもらうのではなく、自らの活動により生活や作品の制作に必要な収入を得、それらの収入を用いて作品を執筆する、その違いがある。「文士」と「文学者」には、文筆活動を含む自らの活動により、主体的に経済の流れを生み出すことを意識しているかどうかが違うのである。『野分』には、生産活動に着眼し、富豪と学者、文学者を、金銭を生み出す技術の専門家／金銭の活用手段の専門家の対立構造で捉える道也の金銭観とともに、慈善活動のような、貧富の違いを問わず、対価を支払う消費活動により金銭の流れを生み出し、社会や困窮する人の力になることを可能にする経済活動も対比的に描かれているのである。

(5)

高柳は演説から帰って、とうとう咯血して寝込んでしまう。その高柳に、中野君は転地療養のための費用を出そうと提案する。しかし、一方的に人の世話になるのが嫌な高柳は、なかなかその提案を受け入れない。

「それぢや、君は無意味に人の世話になるのが厭なんだらうから、その所を有意義にしようぢやないか」と云ふ。

「どうするんだ」

「君の目下の目的は、かねて腹案のある述作を完成しやうと云ふのだらう。だから夫を条件にして僕が転地の費用を担任しやうぢやないか。逗子でも鎌倉でも、熱海でも君の好きな所へ往つて、呑気に養生する。只人の金を使って呑気に養生する丈では心が済まない。だから療養かたぐい、気が向いた時に続きをかくさ。そうして身体がよくなつて、作が出来上つたら歸つてくる。僕は費用を担任した代りに君に一大傑作を世間へ出して貰ふ。どうだい。夫なら僕の主意も立ち、君の望も叶う。一挙兩得ぢやないか」

高柳君は膝頭を見詰めて考へていた。

「僕が君の所へ、僕の作を持つて行けば、僕の君に対する責任は済む訳なんだね」

「どうさ。同時に君が天下に対する責任の一分が済む様になるのさ」

このように言われてようやく高柳は、中野君から転地療養のための費用を受け取る。

「なには丈持つて行くがいゝ。実はこれは妻の發議だよ。妻の好意だと思つて持つて行つてくれ玉へ」

一方的な贈与ではなく、中野は高柳にゆるやかに文学作品という対価を求めている。対価があることで、経済活動の中に文学が組み入れられるのである。

高柳が転地療養のための暇乞いに道也の家を訪れると、道也の文筆活動を止めさせようと、妻と会社役員である道也の兄が結託して金を借りたことにして、金を借りたとされる鈍栗眼の男に、道也は借金の返済を迫られている。実業家の助けを借りないと生活に必要な金銭が得られないとなると、道也が人生と生活のすべてを賭けて試みた、実業家から一方的に恵んでもらう関係からの離脱は不可能であることを証明してしまうことになる。道也はその

危機にある。その場に高柳が居合わせた。

やがて眼を挙げて鈍栗の方を見た。

「君、此原稿を百円に買つて上げませんか」

「エへ、、、。私は本屋ぢやありません」

「ぢや買わないですね」

鈍栗が道也の原稿を買うように言つた時は、買わないと高柳は明言している。しかし、その直後、

「先生」

「何ですか」

「此原稿を百円で私に譲つて下さい」

高柳は道也の「人格論」の原稿を百円で譲つてもらいたいことを道也に申し出る。

「い、え、い、んです。好いから取つて下さい。——いや間違つたんです。是非此原稿を譲つて下さい。——先生私はあなた
の、弟子です。——越後の高田で先生をいちめて追ひ出した弟子の一人です。——だから譲つて下さい」

金額としては、鈍栗に支払うのも道也に支払うのも同じ百円であるが、道也に向けて百円が支払われることにより、高柳の道也への越後の高田で追ひ出したことの謝罪と、道也を敬愛する心情の表明と共に、道也への金銭の流れが生み出される。

愕然たる道也先生を残して、高柳君は暗き夜の中に紛れ去つた。彼は自己を代表すべき作物を転地先よりもたらし帰る代りに、より偉大なる人格論を懐にして、之をわが友中野君に致し、中野君とその細君の好意に酬いんとするのである。

中野、高柳、道也の三人という小さな範囲ではあるが、高柳の思いと共に「人格論」を媒介に「百円」という金銭の流れが生み出される¹⁵⁾。高柳の思いと行動がきっかけとなり、小さいながらも文学作品を媒介として経済が循環している。この小さな循環の先には、文学に関心があり経済力もある中野君の紹介で「人格論」が出版される等、より多くの人々が広い範囲で巻き込みつつ、さらに規模が大きくなった文学作品を媒介にした経済の循環が想定できる。

生産や資本の蓄積のみでは経済活動は停滞する。経済成長には生産と消費のサイクルの円滑な循環が不可欠なことを考えると、消費も生産と同等に重要な経済活動である。実現したい意図を持って金銭を支払うことは単なる消費活動に見えても、目的に叶う金銭の流れを伴った経済の循環と望ましい社会の実現に貢献する活動なのである。

組織的な生産活動や金銭の蓄積を行うためには一定の条件を満たす必要がある、すべての人に開かれている訳ではない。一方消費は規模の大小はあっても、人間が社会で生きている以上必ず附随する活動である。だからこそ、各個人が定見を持って消費活動を行うことは、それがほんのわずかな金額であっても、望ましい金銭の流れを生みだし、社会を変えることにつながる。文学が「社会問題や人生問題に対する豊かな判断力」「人のために役立ちたい思い」の媒介物として金銭の循環に組み込まれることにより、「社会問題や人生問題に対する豊かな判断力」「人のために役立ちたい思い」も広く流通し、社会に位置を得ることができる。「野分」の背景にはそのような文学観が存在するのである。

注(1) 「中央公論」明治四〇年二月

(2) 「読売新聞」明治四〇年一月二七日

(3) 道也を含めた人物形象に幾ばくかの滑稽味があり、作品の内容を担うに価する重みが足りない点を批判する他の評としては、銀漢子「小説月評」(『早稲田文学』明治四〇年二月)がある。

道也先生のやうな人は何だか文學士といふ肩書を有つ人の中に居さうにない。飄輕な漢學者臭い。作者が道也を「拘泥せぬ」人に描かうとしたゞけの性格が淺薄で重みが足りぬ。高柳の方が寧ろ道也に比ぶれば實際にありさうに出來てゐる。

(4) 「二六新聞」明治四〇年一月七日

(5) 前掲 銀漢子「小説月報」

(6) 越智治雄「作品論 野分」『国文学 解釈と教材の研究』昭和四十四年四月 學燈社

(7) 西垣勤「野分」私論『日本文学』昭和四十七年六月 日本文学協会編・未來社刊

(8) 藤堂尚夫「漱石の一断面——〈金〉をめぐる——」『仁愛国文』昭和六三年一月二月 仁愛女子短期大学国文学会

(9) 拙稿「夏目漱石『野分』考——道也における金錢の問題をめぐる——」『日本文藝研究』平成六年九月 関西学院大学日本文学会

(10) 前掲 西垣勤「野分」私論」において、「教師をやりながら『人格論』の完成を急いだ方がはるかに能率的だろう。しかし道也にはそれが出来ない。出来ないのは『人格論』と教師稼業とが内的に(傍点原文)矛盾するからである。『人格論』の完成迄は普通の教師としてごまかしていればいいなどというのは、あるいは『人格論』にだけ人間性を賭けてあとは皆捨てて適当に生きるなどというのは、道也にとってやり切れぬ俗論・ゴマカシに過ぎない。」と、道也にとって、『人格論』の執筆をはじめとする文筆活動と教師で生計を立てることは両立しないことが指摘されている。

(11) この箇所について、藤堂尚夫は「道也は「芸」と「学問」とを分かち、「芸」を売ること自身「道徳的の労力」を買収されることを防ごうとしたのだ。」と述べている。(藤堂尚夫「野分」論——冒頭をめぐる——)『仁愛国文』平成元年一月二月 仁愛女子短期大学

(12) 長嶺重敏は「長谷川如是閑言うところの「読書中毒」「読書病」にかかったこれらの「煩悶青年」達の読書は、決して音

読スタイルではあり得なかつた。新聞紙上で「平素読書を好み寸暇あれば必ず図書館へ入るを楽しみ」にしていたと報じられた藤村のように、彼らは自己と対話しながら、あるいは図書館にこもりながら一人黙って本を読む者達であった。」と、「煩悶青年」達の公共の場での黙読という読書スタイルについて述べている。(長嶺重敏『雑誌と読者の近代』平成九年七月 日本エディタースクール出版部)

(13) 拙稿「夏目漱石『野分』論——批評家の誕生——」(『阪神近代文学研究』平成一四年三月 阪神近代文学会)において、この箇所を「テキストと相互に関連し合いながら、読みの進行と同時に生み出される、高柳による解釈の生産過程そのものが見事に視覚化されている。」と評し、「金持ち」「俗物」批判として書かれた「解脱と拘泥」に、道也の意図を越えたところで、高柳が新たに「青年の煩悶に対する解決」論としてテキストの価値を発見した点を述べた。

(14) 相原和邦は、白井道也が「文学者」と位置づけられている点に関して、「平岡さんの言われるように、道也の場合は、文筆といつてもたんなる小説ではないし、演説など文筆以外の言語活動に広がっているのはまぎれもない事実ですが、まさにそこに狭い意味での文芸・趣味的な文学をこえた言語表現の使命が自覚され、社会へのかかわりが強く意識されているのであり、それがはじめに把握したような広汎な「文学者」の概念とマッチしているんじゃないでしょうか。」と発言している。(『シンポジウム日本文学14「夏目漱石」昭和五〇年一月 学生社』)

(15) 江口朗は「高柳を救った(枯れる前の仕事)」とは、高柳が死ぬ前に小説を完成させることではない。「自己を代表すべき作物」^{きさくつ}「より偉大なる人格論」(傍点原文)を利害得失の世界に生きる中野に手渡すことである。「解脱と拘泥」に「趣味の墮落したものは依然として現存する。現存する以上は墮落した趣味を傳染せねばやまぬ。」とあるが、「人格論」の手渡しは、まさにこのこととは逆の高尚な趣味の傳染という意味を持つ筈である」と述べている。(江口朗『野分』—自己実現の情熱—(『国文学試論』平成元年一月 大正大学大学院文学研究科)「趣味に富んだ」中野は、道也の「人格論」で啓蒙されるべき対象には含まれないと考えるが、高柳の行為によって、高柳の思いとともに「人格論」で表現されているはずの高尚な趣味が、傳染するように広がるという点については首肯できる。

*底本は『漱石全集 第三卷』平成六年二月 岩波書店 による。但しルビは省いた。

(みやぞの みか・常磐会学園大学准教授)